新春企画

# 時代を超えて今も蘇る大町桂月の足跡

大町桂月が初めて十和田湖を訪れたのは、明治41年8月。今から100年余り前のことです。雄大に広がる湖畔の景色に感銘した桂月は、その想いを紀行文や文芸作品に発表。十和田湖や奥入瀬渓流などを広く世に紹介しました。また、十和田湖の国立公園指定に尽力するなど、今日の十和田湖観光の礎を築きました。桂月が詠んだ歌は、時代を超えてたくさんの人々に愛され、多くの文学碑が市内に点在しています。

## 豊かな筆才と美文で山水の秘境を広く世に紹介した大町桂月

「住まば日本　遊ばば十和田　歩きゃ奥入瀬　三里半」の歌で知られる明治の文豪、大町桂月。明治41年8月に初めて十和田湖を見た桂月は、その雄大さや自然の美しさに感動し、雑誌「太陽」に紀行文を掲載。十和田湖、奥入瀬を全国に印象付けました。

桂月は、「一寸見残してきたことに気が付くと、疲れた脚、暮れかかるときをも構わず、一里二里と後戻りしても窮め尽くして来る」と言われるほど人一倍旅への想いが強かったようです。

その後も十和田湖や奥入瀬、八甲田の美しい自然と人情に魅かれ、何度も蔦温泉を訪れ、東北各地の山水を探勝しています。

大正12年、13年には長期にわたり、蔦温泉旅館に滞在し、「蔦温泉帖」や「冬籠帖」など数多くの文芸作品やスケッチ絵を残しています。晩年の大正14年には、本籍を蔦に移し、「極楽へ　こゆる峠のひとやすみ　蔦のいで湯に　身をばきよめて」と辞世の歌を遺し56歳の生涯を閉じています。

## 十和田湖の国立公園指定に尽力

昭和11年2月、十和田湖は国立公園に指定されました。桂月はこの指定に力を注ぎ、大正12年に起草した「十和田湖ヲ中心トスル国立公園設置ニ関スル請願」の請願文は、政府関係方面に大きな反響を呼び指定の気運を大いに高めました。そして、亡くなる1カ月前には、桂月の公的絶筆とされる「十和田国立公園期成会趣旨書」を執筆しています。

休屋地区の御前ヶ浜に佇む「乙女の像」は、十和田開発に尽力した大町桂月、武田千代三郎元県知事、小笠原耕一旧法奥沢村長の三功労者を讃え、昭和28年10月、当時の県知事津島文治（作家・太宰治の兄）によって国立公園指定15周年を記念して建立されたものです。桂月は「十和田はわたしの箱庭である」を口癖に、国立公園指定に貢献しました。

— 桂月全集より

明治２年高知県高知市生まれ。本名は大町芳衛。郷里高知、桂浜の月を想い桂月と号しています。

桂月が書いた「蔦温泉帖」

# 市内に点在する大町桂月の文学碑

### 道の駅奥入瀬

**1** かすみたる
下界を四方に　見下して
我れひとりたつ　堅雪の山

**2** 鶯や　脚下積雪　雲の海

**3** 渕沢を　すぐれば人乃里ならず
蔦をわたりて　神園に入る

### 焼山郵便局前

**5** 住まば日本　遊ばば十和田
歩きゃ奥入瀬　三里半

**6** 立田姫　錦をさらす　大厳に
みだれてかかる　白糸の瀧

**7** さく花に　青葉まじりて
春夏を　ひとときに見る
みちのくの山

**8** いで湯わく　蔦乃山路
さよふけて　月のみわたる
猿の空橋

### 八甲田パノラマパークゴルフ場

**4** 花外は酒をのまむとて
下界をさして下りゆく
桂月は酒をのまむとて
尾上をさしてのぼりゆく
花外は好む梯子酒
痛飲淋漓千鳥足
世のあはさなるの物語り
花外は泣いて聞くならむ
峰のさかなは木の子なり
鳥の音楽雲の舞
各奔利走の塵の世を
桂月は足の下に見る
明日は戻りて一つ宿
共に語らん風呂の中
さらばと渡る丸木橋
二人をへだつ谷の水

### 蔦温泉地内

**9** 世のひとの　命をからむ　蔦の山
湯のわく處　水清きところ

**10** 十年あまり　五とせ前に　見しわらや
今こそ玉のうてなりけり

**11** 四方の木は　みな冬枯れて　ふる雪に
一もとあをし　蔦の鉾杉

**12** こころよさ　何にたとへむ　湯の中の
顔のほてりて　雪のちりくる

**13** 沼に舟うけ　姫鱒釣って
風呂で月見る　山の中

**14** こころよさ　何にたとへん　湯の瀧に
肩をうたせて　冬の月見る

**15** 今しばし　山の錦に　たてきりて
やくし如来の　生まれいでぬる

### 蔦・大町桂月の墓

**16** 極楽へ　こゆる峠の　ひとやすみ
蔦のいで湯に　身をばきよめて
（辞世の歌）

### 文学碑案内図